

# 博士學位論文

論文の要旨および審査結果の要旨

2018年3月

人間総合科学大学

## — 目次 —

訪問看護師と訪問介護員の職業性ストレス —ストレスコントロールに関わる諸要因の分析—

The Occupational Stress of Visiting Nurses and Visiting Caregivers : The Analysis of Factors Relating to Stress Control

・・・ 橘 達枝 ・・・ 1

Factors Affecting the Health-Related Quality of Life of Community-Dwelling Elderly in Japan: A Focus on Spirituality

・・・ 小林 美奈子 ・・・ 2

料理作業が作業者の不安と気分にあぼす影響

Effects of Cooking Tasks on a Cook's Mood and Anxiety

・・・ 木村 滋子 ・・・ 3

学校登山が生徒の自己効力感にあぼす影響

The effect of school mountaineering on self-efficacy of junior and senior high school students

・・・ 大賀 淳子 ・・・ 4

首都圏在住中高年者における健康行動を促進する心理社会的要因の研究

—共分散構造分析を用いた因果関係モデルの検討—

Psychosocial factors to promoting health behaviors among middle-aged and elderly people in the metropolitan areas —Consideration of causality model using covariance structure analysis—

・・・ 遠藤 寛子 ・・・ 5

大学生の対面コミュニケーション能力にあぼす要因

Factors that affect the face-to-face communication skills of university students

・・・ 澤田 幸子 ・・・ 6

氏名	橋 達枝		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 32 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	訪問看護師と訪問介護員の職業性ストレス — ストレスコントロールに関わる諸要因の分析 —		
研究指導教員	教授 吉田 浩子		
論文審査委員	主査 久住 武	副査 小岩 信義	副査 鈴木 はる江 副査 庄子 和夫

## 博士學位論文内容の要旨

本研究は、対人支援職者の職業性ストレスの低減につながる新たな実証的知見の創出を目的に、近接職種である訪問看護師と訪問介護員に着目し、A 県の訪問看護ステーションまたは訪問介護事業所に所属する訪問看護師 213 人、訪問介護員 194 人を対象に、職業性ストレス簡易調査票を用いた無記名自記式質問紙郵送調査を実施した。得られたデータを分析した結果、どちらもストレスコントロールの良い集団で、就労に対する肯定的な価値観の持続がストレスコントロールの良さに関連し、職種によりストレスコントロールの関連要因が異なることが明らかになった。これまでにも当該職種の職業性ストレスの高さに着目した研究はなされているが、ストレスコントロールの良さに着目した研究はなく、当該集団を新たにストレスコントロールの良い集団として捉え、それに関連する諸要因が示されたことは、心身相関の一端の実証に留まらず、当該職種の新たな一面の発見であった。

## 博士學位論文審査結果の要旨

本研究は、対人支援職者の職業性ストレスの低減につながる新たな実証的知見の創出を目的に、近接職種の訪問看護師と訪問介護員に着目し、職業性ストレス簡易調査票を用いて「ストレス要因」「ストレス反応」「満足度に対する影響要因」について調査・分析した。

その結果、どちらの群ともストレスコントロールが良い集団で、就労に対する肯定的な価値観の持続がストレスコントロールの良さに関連していることを明らかにした。これまでにも当該職種の職業性ストレスの高さに着目した研究がある中、ストレスコントロールの良さに着目した研究はなく、当該集団を新たにストレスコントロールの良い集団と捉えた上で、それに関連する諸要因を取り上げ重回帰分析を行っている。年齢・経験年数・就業形態によって、ストレス反応に関連する「ストレス要因」と「満足度」の回帰式を求め、その関係性について両群に共通する部分を見出している。共通する部分は、両群ともストレス反応の「活気」と影響要因の「働きがい」が強く関係していることを明らかにしている。

著者は、就労に対する肯定的な捉え方という「こころ」の側面が重要であることを見出しており、心身健康科学研究に新たな知見を提供したといえる。以上のことから申請者に博士 (心身健康科学) の学位を授与する価値があるものと判断した。

掲載雑誌：『心身健康科学』(第 14 巻 2 号)

氏名	小林 美奈子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 33 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Factors Affecting the Health-Related Quality of Life of Community-Dwelling Elderly in Japan: A Focus on Spirituality		
研究指導教員	准教授 中山 和久		
論文審査委員	主査 小岩 信義	副査 鈴木 はる江	副査 島田 涼子 副査 矢島 孔明

## 博士学位論文内容の要旨

本研究の目的は、日本の地域在住高齢者の健康関連 QOL に影響を与える諸要因を明らかにすることである。2015 年に首都圏近郊農村地域の老人クラブの 898 人に質問紙調査を実施し、有効な回答が得られた 715 人を分析対象とした。調査項目は基本属性 (年齢、経済的ゆとり等)、健康状態 (疾病の有無等)、高齢者版スピリチュアリティ健康尺度 (生きる意味・目的、自己超越等から構成される。以下 SP 健康尺度)、LSNS-6、SF-8 であり、SF-8 の PCS と MCS を従属変数、残りを独立変数として重回帰分析を行った。その結果、PCS の上昇要因は経済的ゆとり、SP 健康尺度 (生きる意味・目的)、低下要因は年齢、健康状態 (心疾患、消化器疾患、骨関節症、腰痛、膝痛) であった。一方 MCS の上昇要因は経済的ゆとり、低下要因は健康状態 (がん、頭痛)、SP 健康尺度 (自己超越) であった。この結果は、高齢者の心身の健康感を高める上で、主観的経済状況、年齢、疾病に加え、スピリチュアリティについても把握する必要性を示唆するものである。

## 博士学位論文審査結果の要旨

申請者の研究は、日本人の高齢者を対象に、健康関連 QOL に及ぼす諸要因として、先行研究の中で既に明らかにされている①基本的属性 (年齢、性別、収入等)、②ソーシャルネットワーク、③疾患の有無に加えて、新たにスピリチュアリティ健康尺度を取り入れて、量的分析を行ったものである。

文化的背景の違いを考慮し、日本人にフィッティングしたスピリチュアリティに着目している点、さらに日本人高齢者の健康関連 QOL に関連するスピリチュアリティ項目を具体化した点に独創性と新規性があり、博士の学位を与えるに値する研究成果と判断した。

掲載雑誌：『Health』 (2017 年 9 月号) P1095-1111

氏名	木村 滋子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 34 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	料理作業が作業者の不安と気分にあげざす影響		
研究指導教員	教授 久住 武		
論文審査委員	主査 小岩 信義	副査 庄子 和夫	副査 鍵谷 方子 副査 藤原 宏子

## 博士学位論文内容の要旨

### 【目的】

料理に関する先行研究では、自己の自信回復、食べる楽しみを取り戻した事例、あるいは、共同調理、共食が「楽しい」との報告はあるが、料理作業の一部に焦点を当てた報告はない。そこで、本研究では「切る」と「手でこねる」という 2 種類の料理作業に焦点をあて、それぞれの料理作業が作業者の不安と気分にあげざす影響をみることを目的とした。

### 【方法】

対象は、料理の経験がほとんどない大学 1 年生男女延べ 25 名とし、「切る作業」11 名、「手でこねる作業」14 名の 2 種類の場合について、各料理作業あり・なしの 2 回料理を行った。料理作業の不安への影響は新版 STAI、気分への影響は日本語版 POMS 短縮版を用いて評価した。不安と気分の調査は、それぞれの料理前と料理終了時に実施し、各料理作業のあり・なしで比較した。

### 【結果】

特性・状態不安 (STAI) と総合得点 TMD (POMS) は、「切る作業」と「手でこねる作業」のどちらの料理作業においても、作業のあり・なしに関わらず、有意に低下した。POMS の下位尺度をみると、「手でこねる」料理作業の場合、作業ありのみで「怒り-敵意」が有意に低下し、「活気」が有意に上昇した。「疲労」「緊張-不安」「抑うつ」は、作業あり・なしともに有意に低下し、「混乱」はともに有意な変化を認めなかった。「切る」料理作業の場合、作業ありのみで「緊張-不安」「抑うつ」「混乱」が有意に低下し、「疲労」は作業あり・なしともに有意に低下し、「怒り-敵意」「活気」は作業あり・なしともに有意な変化を認めなかった (有意水準:  $p < 0.05$ )。

### 【考察】

2 種類の料理作業のそれぞれの場合において、作業あり・なしで、POMS 下位尺度に異なる点を見出すことができた。この異なる点は、食材に直接触れるか否かによる料理作業中の触感の違いが影響した可能性があると考えられる。

### 【結論】

料理作業の内容を一部変えることで、作業者の不安や気分にあげざす内容を、より詳細にみることができたことから、料理作業と心身関連の関係を明らかにすることができた。

## 博士学位論文審査結果の要旨

本研究は、2 種類の料理作業（「切る」および「手でこねる」）に着目し、料理作業が作業者の不安と気分にあげざす影響を適切な質問紙を用いて評価した実験研究である。先行研究では、共同作業から共食までの料理全体を通して、気分や心的状態の変化を包括的に評価した報告は存在したが、本研究のように料理作業を構成する個々の要素に重点をおいて効果を検証した研究はこれまでなく、研究デザインに独創性を認めた。

使用された心理評価は限定されているものの、料理そのものによる影響と、2 種類の作業による影響の差異を明らかにした点が、料理作業と心理状態との関係について新知見をもたらしている。以上のことから、申請者の研究成果は心身関連の科学に貢献し、博士 (心身健康科学) の学位を授与する価値があるものと判断した。

掲載雑誌: 『心身健康科学』 (第 15 巻 1 号)

氏名	大賀 淳子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 35 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	学校登山が生徒の自己効力感に及ぼす影響		
研究指導教員	教授 島田 涼子		
論文審査委員	主査 小岩 信義	副査 庄子 和夫	副査 中野 博子 副査 藤原 宏子

## 博士学位論文内容の要旨

本研究は、生徒の自己効力感への学校登山の影響について明らかにすることを目的とした。長野県の山への登山を行った 2 つの中学と 2 つの高校の生徒（登山参加者 531 人、登山をしなかった対照群 73 人）を対象として、登山前、後、1 ヶ月後（登山をしなかった対照群 73 人）を対象として、後、1 ヶ月後（登山をしなかった対照群では相当時）における自己効力感の測定を行った。また、登山を行った生徒には登山後に、Bandura の 4 つの情報源、波多野らの 5 つの条件、および登山での体験に関する質問紙調査を行った。その結果、登山に参加した生徒の自己効力感は登山後に有意に上昇し、1 ヶ月後まで保たれていた。これに対して、対照群の自己効力感に変化はみられなかった。また、登山前の自己効力感が低かった生徒のほうが登山による自己効力感の上昇が大きかった。登山における自己効力感の変化への関連要因は「山の自然の印象」、Bandura の「代理的経験」、および波多野らの「他者との暖かいやりとり」であった。したがって、学校登山においては、山の自然に心を動かされることに加えて、友人の頑張る姿から刺激を受けたり、友人との暖かなやりとりを通じて、生徒の自己効力感が上昇すると考えられた。

## 博士学位論文審査結果の要旨

本研究は、「学校登山」によって、生徒の自己効力感が上昇することを明らかにした。これまで登山を含む複数の要素で構成された野外活動によって自己効力感が高まることを報告した研究はあったが、登山単独の影響を検討した研究は存在しなかった。また、登山による自己効力感への影響要因として、①山の自然の印象、②代理的経験、③他者との暖かいやりとりという心理・社会的要因を抽出した点に新規性を認め、身体活動による心理的影響について新たな知見をもたらしている。以上のことから、申請者に博士（心身健康科学）の学位を授与する価値があるものと判断した。

掲載雑誌：『心身健康科学』（第 14 巻 2 号）

氏名	遠藤 寛子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 36 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	首都圏在住中高年者における健康行動を促進する心理社会的要因の研究 — 共分散構造分析を用いた因果関係モデルの検討 —		
研究指導教員	教授 鈴木 はる江		
論文審査委員	主査 鍵谷 方子	副査 小岩 信義	副査 吉田 浩子 副査 中山 和久

## 博士学位論文内容の要旨

健康行動を促進する心理社会的要因の因果関係モデルを構築することを目的として首都圏在住の中年、前期高齢者世代を対象にインターネット調査を実施し、1,240 名分を分析対象とした。健康行動の関連要因として抽出された、「水平的繋がり」、「ソーシャルサポート」、「認知的ソーシャル・キャピタル：SC」、「健康観」、「首尾一貫感覚：SOC」の構成概念を潜在変数とした共分散構造分析により、因果関係モデルを作成した結果、健康行動を直接的に促進する要因は、すべての年代・性別において、自分が健康であると感じ自身で健康をコントロールできると考える健康観であり、中年世代に比べ高齢世代で健康行動に強く影響した。高齢女性では水平的繋がりも直接的に健康行動に影響した。健康行動の間接的促進要因として、すべての年代・性別で SOC の高まりが健康観を高め、健康行動を促進した。また認知的 SC は、中年女性及び高齢男性では健康観、高齢女性では水平的繋がりにも影響し、健康行動を間接的に促進した。健康行動を促進するには健康観を高める要因である SOC の強化が有効であり、さらに、高齢期に向けて男性に対しては認知的 SC の強化に寄与する働きかけ、女性に対しては水平的繋がりへの促進に向けた支援が有効であることが示唆された。

## 博士学位論文審査結果の要旨

本論文は、健康行動を促進する心理社会的要因について、中年・高齢者の世代別および性別に、要因相互の因果関係モデルを共分散構造分析を用いて構築することを試みたものである。研究成果として、世代別・性別に異なる因果関係モデルが見出され、健康行動を促進する心理社会的要因に世代・性別毎の特徴があることが明らかとなった。

口頭試問では、以上のような研究の内容について 20 分間の口頭発表と 40 分間の質疑応答が行われた。各審査委員からの研究内容に関する各種の質問に対し、申請者は概ね適切に応答した。

審査委員会における審議の結果、①質問に対する返答内容に一部明確さを欠く場面があったが、研究内容の理解について、合格点に達していると言える。今後も論理的な思考の研鑽を続けることを前提に学位に値すると考える。②研究内容および周辺学問領域についてよく理解している。③本研究と他の先行研究における「健康観」との異同の理解の深化と説明の明確化が必要である。との意見が出され、今後の研究の発展を見据えた場合に考慮されるべきことはあるが、研究目的の特色・独創性・意義と背景、結果、知見の新しさ、考察・結論の妥当性、心身健康科学における位置づけ、審議に対する応答の適切性、申請者の研究能力のいずれにおいても合格点に達しており、博士 (心身健康科学) の学位に値すると判断され、全会一致で合格と判定された。

掲載雑誌：『心身健康科学』（第 14 巻 1 号）

氏名	澤田 幸子		
学位の種類	博士 (心身健康科学)	証書番号	甲第 37 号
学位授与年月日	平成 30 年 3 月 22 日	学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	大学生の対面コミュニケーション能力に影響を及ぼす要因		
研究指導教員	教授 久住 武		
論文審査委員	主査 小岩 信義	副査 庄子 和夫	副査 鍵谷 方子 副査 矢島 孔明

## 博士学位論文内容の要旨

大学生の対面コミュニケーション能力に影響を及ぼす要因を検討する目的で、大学生 546 名を対象に廣瀬らの基本的コミュニケーション尺度を用いて、心身の健康感、心身の状態、表情の読み取り、背景との関係を調査した。その結果、対象者の心身の健康感の平均得点は  $72 \pm 19.4\%$ 、対面コミュニケーション得点は 130 点中  $94.8 \pm 12.8$  点だった。心身の健康感を四分位法で高群、中間群、低群の 3 群に分類して対面コミュニケーション得点を比較したところ、高群は中間群や低群より高かった ( $p < 0.01$ )。また、健康感とコミュニケーション能力を高くしている背景にはアルバイトや友人が多い、ストレス解消法をもっている、規則正しい生活があげられた。対面コミュニケーション能力に影響を及ぼす要因について重回帰分析を行った結果、正の方向に影響した要因は「喜び」の表情が読み取れる、充実感がある等で、負の方向は物忘れがある、活気がない等だった。さらに共感性に関わる表情の読み取りとの関係が重要であることがわかった。

以上のことから、心身の健康感や社会性を育むアルバイトやストレス対処をしながら学生生活に充実感をもっていることで高くなり、それらが対面コミュニケーション能力を高めていると考える。対面コミュニケーション能力には喜びの表情を読み取れる、心身共に健康であることが大きく影響していた。

## 博士学位論文審査結果の要旨

本研究は、大学生の対人コミュニケーション能力について、従来調査されてきた対象者の①心理・社会的背景に加えて、共感性の基礎となる②心身の健康感および③表情の読み取りの正確度との関連を検討した着想にユニーク性を認める。

本研究の研究成果は、学生が対人関係を形成する上で重要となる要因を特定し、これに特定の表情の読み取りが正確であることと、心身両面の健康感の関与度を明らかにしている。以上のことから、申請者の研究成果は心身相関の科学に新知見をもたらしており、博士 (心身健康科学) の学位を与えるに相応しいと判断した。

掲載雑誌：掲載雑誌：『心身健康科学』（第 15 巻 1 号）



